

## 復興期畫談〔二〕

黒田清輝演述

### ◎第一章

復興期の初めの時代、即ちチオット派の始つた時分から、十五世紀へかけての畫風の變遷を二と纏めにして見るのに、一寸都合の好いのはビーズといふ所の「カンポ・サント」といふ建物の壁畫である。

「カンポ・サント」のことを話す前に、全體ビーズといふ所の位置彼れ是れに就て、ざつとお話しをして置きます。

地圖を披いて見れば直に分るのですが、ビーズは伊太利國中の北部にある小さな町であります。フロランスといふ都を西の方へ距ること凡そ二十里、モン・ピザンの麓で、アルノといふ川があつて其の兩岸に出來て居る市街である。アルノの川口迄三里計りあります。極小さい所ではありますが、伊太利國中のマア古い町の中に數へられて、中世には非常に盛んな所であつた。

此の町の出來たのは紀元前百八十一年である。さうして十世紀から十五世紀迄共和国で、此の間が最も盛んな時代であつた。其の時分には人口が十二萬以上もあつて、地中海のコルス、サルディニユなどの島を領地にして居つて、地中海の西部に覇を稱した位の一都會であつた。夫で昔は此の如く盛んな所でありましたが、今日では至つて寂しい所になつて、人口も僅か三萬八千位になつて居ります。今でも町の周圍は全盛時代の遺物の壁で圍つてある。

此の町で旅人が第一に觀に行く所は寺院と其鐘樓及び洗禮堂などでありますが、此の鐘樓のわざと斜めに曲げて

あるのが最も有名なので、皆な珍らしがつて觀に行きます。寺院と洗禮堂は十一世紀に鐘樓は十二世紀に出來た。是等の建物は町の西北の隅に建つて居ますが、周圍は廣い芝原になつて居る。その寺院の北側の方に長屋造りの様な極さつぱりとした平家ひらやの建物が一つあります。之れを「カンポ・サント」と名づける。

「カンポ・サント」の入口は南向きになつて居る小さい入口である。此の建物は十三世紀に出來たのであります。建築師はデオヴァン・ニ・ピザノといふ人で、千二百七十八年に始めて千二百八十三年に家の大體だけは出來た。此のデオヴァン・ニ・ピザノといふはニコロ・ピザノといふ人の子である。ニコロ・ピザノといふのは至つて有名な彫刻師であつて、千二百七年から千二百七十八年迄の人である。此の人は寺院の建つ時に其の裝飾をやる爲めに希臘の技術家が來て居つたが、其の希臘人に就て技術を替占したといふことである。

此の「カンポ・サント」は畢竟墓場であつて、有名な人物を此處に埋めたのである。之れを建てるに就て一つの話がある、夫れはピースの人が十字軍を起してゼリユザレムに行つた時に、其處から砂を持つて歸つて、其砂を此處へ移して、墓所を拵へたといふ譯ださうです。家の形は東西に長く南北に狭い長方形で、中の造りは廻廊になつて居つて、其の中心は中庭となり、而して廻廊の壁には全然畫まづかりが描いてある。

壁畫は固より一人の手に成つたのではなく、多勢の人がぼち／＼時を費して描いたもので、巧いもあり、拙いのも交つて居る。今日では其の壁畫の中では大部分が消えて見えなくなつて居るのもあり、また修覆した爲めに本當の筆意が分らなくなつて仕舞つたのもあります。

其の多數の壁畫の中で、私の忘れることの出來ないのは二人の畫家の作である。其の一つは南側の東の方に寄つた

所に描いてあるのですが、オルカニヤの作だといふことで地獄極樂 Triomphe de la mort: Jugement der 魂 なる圖が描いてある。もう一つのは北側の壁に描いてある。其れはベノツゾ・ゴツゾリの筆です。

○ベノツゾ・ゴツゾリ

ベノツゾ・ゴツゾリの實の名はベノツゾ・ヂ・シセ・ヂ・サンドロで、千四百二十年にフロランスで生れて千四百九十七年頃にピーズで死んだ。非常な勉強家でもあり。仕事が早く、大作を處々に残した。其の中最も有名なのがフロランスの「リカルヂ」宮殿中の壁畫と、ピーズの「カンボ・サント」の壁畫である。

此人の畫は所謂歴史的風俗畫で、近い所では佛蘭西のゼラル、グロ、ドラロシユ、オラス・ウエルネ、メイッソニエ、ジエロームの類である。

全體此の歴史的風俗畫と云ふのは歴史畫と風俗畫との間のもので、風俗畫に似た歴史畫と云ふてもよし、また歴史畫見たやうな風俗畫だと云ふことも出来る。勿論極々の古代のことを描いた歴史畫はいかにも歴史畫に違ひないが、段々近世に至るに従つて歴史畫の人物が其の服装かれこれの點は風俗畫に異ならず。又其の當時の一寸した出來事を描いた風俗畫の人物が歴史に名を残すやうな人で有れば、其の畫は歴史畫と云ふても差支はない。然しいづれにしても純然たる歴史畫でもなく、普通の風俗畫とも違つて居る、即ち其れ等を歴史的風俗畫と名づける。

ベノツゾ・ゴツゾリはフラ・アンジエリコの弟子である丈に、人物の顔色などに何となく優さしい所が有るが、アンジエリコのように天國の住人とでも云ふべき人物のみを描かなかつた、随分緻密な觀察力を持つて居たと見えて、人物

の動作などか誠に自然で面白い、只どういふものだか、骨格及び「プロポリシヨシ」は餘り完全でないベノツゾ・ゴツゾリの最も得意なのは風景である。風景と來ては其時代で誰れも及ぶものはあるまいと思はれる、又好んで能く動物も描いた。

ベノツゾ・ゴツゾリといふ人はアンジェリコの門人であるといふことは、前にも申して置た通りだが、此人は畫家として世に知らるゝ前に、既に立派な彫刻家であつたさうです。ローレンゾ・ギベルチと云つたら至て有名な彫刻家であるが、そのギベルチはフロランスの市中にある大きなヂュオモ寺の前の八角形の洗禮堂の扉を鑄物で拵へた人で、即ち其扉の製作に就て、ベノツゾ・ゴツゾリを助手として雇つて仕事をさせたといふことである、其事は古文書の中に記してある。

こそで此のベノツゾ・ゴツゾリが愈々助手として仕事をする契約をしたのが千四百四十四年の一月であつて、給金のことも詳細書いてあるが、先づ三年間の契約を結んだ。夫れでその頃にベノツゾ・ゴツゾリほどの位の年齢であつたかといふに、千四百二十年に生れて居るから、丁度二十四歳の時である。全體此の扉はミケランジュが極樂の門扉にしてもいゝと云つた位の名作であるのに、其仕事の助手として雇はれる位であつたと見れば、ベノツゾ・ゴツゾリが其頃には最早一かどの立派な彫刻家であつたといふことは明かである、又此の人がギベルチの下にどう云ふ仕事をしたか、其仕事に就て考へて見ても餘程彫金の技術に達して居たには相違ない、其仕事といふのは外でもない、仕上の仕事で、鑄物のさらひだの金鍍金をつけることなどを重にやつたのである。

此の三年間の彫金の仕事が濟んでから、直にアンジェリコに随つて羅馬に行き、今度はアンジェリコの助手として壁

畫に着手したといふことであるから、つまり畫ももう一人前の腕前であつた事は無論です。

ベノツゾ・ゴツゾリの製作品は随分澤山残つて居りますが、アンジエリコに就いて仕事をして居た間は丸でアンジエリコの畫風の通りにやつて居たので、此人が本當に自分の腕一杯といふやうな仕事を仕始めたのは、メヂシス家に呼ばれて、フロランスの「リカルヂ」宮殿の壁畫に着手した時からだと思はれる。然し此時には未だアンジエリコの畫風の幾分かは残つて居りますが、兎に角別物になつて全く新式の畫を描き始めたと言つても好い。此の「リカルヂ」宮殿の壁畫と「カンポ・サント」の壁畫が最も世に知られて居りますが、其他に餘り世にはたんと人の知つて居らない畫で、是等の畫よりも却つて出來がよいといふ評判のものが一つあります、其れはサン・ジミニヤノといふ所の「サンタゴスチノ」といふ寺の壁畫で、此の壁畫は「カンポ・サント」の壁畫より前に描いたものだといふ話であります、併し此畫は私は見ないので、此畫の事に就ては別にお話を致しません。

今から五六十年前には佛蘭西から伊太利に旅行するといふことは随分大層なことで、旅行者も至て少なかつたさうだ。無論巴里の美術學校の羅馬賞を得て、官費で留學するのは別なことであるけれども、普通技術家が伊太利見物に行くといふ時には、一人で出懸ける者は少く、二三人連れ立つて一緒に行くといふ風であつた。それで街道は二た筋で海岸通りを行くのと、サンゴタールの山越えをして行くのとで、いづれにしても伊太利に入つて畫を見て歩くのには、有名なラファエルやミケランジュの畫を先きにするよりは、寧ろ十五世紀頃の畫を先きに見たといふことです。夫れには道順の都合もあつたでしやうが、「カンポ・サント」などは一番先きに感服されたのです。私も佛蘭西より伊太利に行つたものですから、「カンポ・サント」を見る以前には只チユランの美術館を見た丈でした

から、「カンポ・サント」で非常に感心して始めて伊太利の美術の眞に盛んなことを知つて、巴里の「ルーヴル」館などにあるものだけでは、伊太利美術の眞相を得ることは出来ないと思つて悟りました。

ベノツ・ゴツゾリがアンジェリコよりも一風變つた畫を描き始めたといふことに就て、批評家は斯ういふ面白いことを言つて居る。アンジェリコは自分の狭い室に小さな窓を開けて、自然を見て居つたが、ベノツ・ゴツゾリはその窓を大きく開いた、此の譬へは二人の畫風の違つて居る點を誠に能く説明して居ると思ふ。成る程ベノツ・ゴツゾリはアンジェリコが決して氣付かなかつた所のものを澤山畫の中に描き込んだ、一寸其の「カンポ・サント」の壁畫によつて見ても、女が頭の上に水瓶をのせて片手に其れを支へながら、又一方の手に三つ四つの子供の手を引て來る所があつたり、其れから葡萄の收穫の所などでは、梯子を半分下りかけて上から葡萄籠を下に立て居る女に渡して居るといふやうな所はよく自然の有様をば寫し現はして居る、即ち窓を廣く明けて世間を見たのである。全體此の「カンポ・サント」の壁畫の中で、ベノツ・ゴツゾリの描いた分は二十四箇所に區分してある。然し今日では其の大部分は消えて了つて居て能く分らないのも澤山ある。

その畫が何れも皆な「バイブル」の中の事を描いたものである。重な人物例へばアブラハム、イザアク、ジヨゼフ、ダウキッド、サロモンなど、いふやうな人物は、皆な伊太利の有名な學者や詩人達の肖像で出來て居て、畫家自身の肖像も其中に描き込んである。斯様に重な人物が皆肖像であるといふ計でなく、歴史上少しも意味のない、而して畫中で第二位に居る所の人物の面部迄も其の時代の人の顔を寫生したものには相違ないのです。

ベノツ・ゴツゾリ以前の人の畫の中にも、たまにはどうかして肖像ではないかと思はれる位のものが無いとも限

りませんけれども、愈々此のベノツゾ・ゴツゾリに至ては、表向におつびらに肖像が歴史畫中に描き込まれることになつた。

又此の外に其作圖の當時の服裝が其儘、古い「バイブル」の中の事柄を描き現はすのに採用されるやうになつて來たのはどういふ理由かといふに、是れは全く自然の勢ひ已むを得ないからであつた。つまり第一に希臘人達の如くに裸體の研究が此の時分に缺けて居つたといふことが大關係を持つて居る。殊にアンジェリコ及び其門弟のベノツゾ・ゴツゾリに至つては、裸體の研究といふことは餘程缺けて居る。又實際裸體はうまく描けない計りでなく、裸體の人物を重に描いて行くと、どうも希臘風のものになつて了つて、耶蘇教らしくなくなつて來る。夫からもう一方では今日のやうに考古學が開けて居らぬ爲めに、古い時代のことを描かうとしても、どういふ服裝であつたか、どういふ器物を用ゐて居たか、とんと分らぬ。夫れ故其當時の姿を寫すことになつた。所で實際どうしても「バイブル」の中でも裸體の人物の入用な場合がある、例へばノエといふ人が酒に酔つて裸で寢て居つたといふ所がある、さういふ圖に至つては甚だ苦しんだ。素より裸體の人物は餘り研究して居ないのだから、無據描くとなると餘程拙い、ベノツゾ・ゴツゾリのノエの裸體なども今日では消えて分らん部分もありますけれども、極不完全なものが出來てるといふことは、一般の評であります。

此のベノツゾ・ゴツゾリの葡萄收穫の圖が其當時から圖らずも非常に評判の畫となつたが、其譯は此畫の端の方に一人の女が描いてありまして、其女が此裸になつて居るのをば、見ない風をして逃げて行くといふ所の姿であります、顔に手をあて、そうして指の股を擴げて、その間から覗いて居るやうなものが描いてある。これが大變評判に

なつて、無理に耻かしがるやうなことをやる 斯ういふことは女に有り勝て其様子を甘く描き現はしたといふので、遂に耻かしい眞似をする女のことを『La vergognosa di Campo-Santo』ポ・サントの耻しがり』と呼ぶやうになつた。

ベノツゾ・ゴツゾリが「カンポ・サント」の壁畫に費したのが凡そ十二年間で、丁度千四百六十九年から千四百八十一年迄かゝつた。斯ういふ大作であつたもんですから、自分の住居もピーズに定めて、そこに移住して仕舞つた。夫れから又ベノツゾ・ゴツゾリには五人の男の子と二人の娘があつたさうです。

此の壁畫は非常に立派な出来で、その當時でも人が大に感心しまして、特に之れを依頼したピーズ市民は大満足で、ベノツゾ・ゴツゾリを大に徳として、「カンポ・サント」の中にベノツゾ・ゴツゾリを葬むることを約束した、而して其通りを實行した。夫れで墓碑の銘によつて調べて見ると、ベノツゾ・ゴツゾリが其墓を貰つたのが、千四百七十八年でありまして、墓を貰つてから後、二十年許りは生きて居たに違ひない、本當に死んだのは千四百九十七年の頃で、其年月は固より確かりとは分りませんが、なんでもフロランスの「サンタマリア」といふ寺にバルドヴェネツチが畫を描いて、その畫の審判役としてピエル・ベルジヤン、コスモ・ロッセリ、フィリッピノ・リビなど、共に呼ばれて行つたといふことがあります、その後間もなく死んだらしいです。

フロランスの「リカルヂ」宮殿の壁畫は、「カンポ・サント」の壁畫に比べますと、大變立派に保存されて、殆んど新しく出来たものゝやうに見えます。さてフロランスといふ所は、矢張りピーズを通つて居るアルノー河の少しく河上によつた所に在つて、伊太利國の中で最も美術品に富んだ町であります。此のフロランスは最も有名で、人の知

つて居る所でありますから、別に歴史は勿論大體の地理又今日の繁華の度合彼是のことは略して茲に述べません、只「リカルヂ」宮殿中の壁畫のことだけをお話します。

「リカルヂ」の宮殿といふのは、中々立派な大きな建物であります、是はメヂシス家の一番最初の住居であります、建築師はミケロッツといふ人で、ベノツヅ・ゴツゾリの描いたのは、その宮殿中の祈禱室で、極小さな薄暗い室であります、祈禱室と言ひますれば、何か佛壇めいたものがあつて、耶蘇の像か何か飾つてあるかと思はれますが、さういふことはなく、只四壁がこのベノツヅ・ゴツゾリの描いた色の鮮かな金箔など澤山使つた壁畫で飾られた綺麗なチンマリとした部屋で、中に這入るとまるで錦の裂にでも包まれたやうな感覺がする。

こんなに綺麗な壁畫が有るのだけでも、此の室は一方の小さい窓から明が採つてある許りで、畫を見るには光線が足りない所から、案内者が其處に用意してある「ブリツキ」の張つた板のやうなものを窓の明りの所に差し當て、外の光線を壁の面に反射させて、畫を見せるといふ趣向になつて居る。壁畫は無論宗教の意味のものでありますけれども、難有といふ觀念よりも寧ろ非常に立派なものだといふ感が先きに立つ。金の刺繡の極はでやかな着物を着た人達が金のかな物の馬具をつけた馬に跨り、大勢の家來を召連れて山中を行列して行く姿になつて居る。其金のかな物や又金の刺繡は皆本金を使つて描いたもので、色が至て鮮かで、又金の色に對して負けない丈の強い色彩が施してあるから、従つて他の色も餘程麗はしい。又馬上の人物などの面部は何某といふ名を知られた人の肖像で、他の人物の顔も勿論誰かの肖像である。

只此の壁畫中で聊か宗教が重になつて居る所は、中に這入て左手の方の壁で、之れには無數の天使とでもいふです

か、羽の生へた頭に後光を頂いた童子が澤山居り、空にも羽の生へたのが澤山飛んで居る。景色中には其時代の立派な建築物なども描き込んであります。此の壁畫全體がいかにもいき／＼として居て、十五世紀の人達を眼前に見るやうである。

又今の壁畫の中には、馬は勿論其他種々な動物が描いてある。遠景の中には、貴族連の鹿狩といふ體が描き現はしてある。動物の形がいづれも皆な確かり出來て居るには驚く。

ベノツゾ・ゴツゾリが出て、其當時の風習と肖像服裝等に據つて歴史畫を描くことゝ爲つて來たので、是れより伊大利の畫風が大層目新らしく爲つた、つまり畫が寫實に傾いて自然に近寄るやうに革まつて來ました。此後ますます此風を學んでやる人が澤山出て參りましたが、先づベノツゾ・ゴツゾリが率先者であつて、前に述べました風俗的歴史畫といふものが自然に生れたのであります。